

『ゲゲゲの鬼太郎』から見る社会

—妖怪の描かれ方の変化—

柳川真衣

本研究では、テレビアニメ『ゲゲゲの鬼太郎』の第1期から第6期を視聴して各期の傾向や特徴について調べ、妖怪の描かれ方がどのように変化しているのか、またそれがどのような社会の背景を反映したものなのかを明らかにする。『ゲゲゲの鬼太郎』は、高度経済成長期という社会背景を受けて生まれ、妖怪研究をするにふさわしい作品である。

第1期では、失われつつある日本の伝統的な生活様式や民俗文化の代わりとして妖怪は求められ描かれていた。第2期では、高度経済成長期に伴う環境破壊や公害、減反政策などで揺れる社会を反映し、それらへのアンチテーゼとしての描写が見受けられた。第3期では妖怪と人間の共存がテーマとなり、バブル経済の明るい世の中を受け、前向きな終わり方をする話が多くあった。第4期では環境問題に触れた内容のものが多くあり、バブル崩壊後の不況や自然災害などもあつてか、第3期までより不安さや暗さが感じられた。第5期では、妖怪の世界と人間の世界が分かれて描かれるようになったことに加え、自業自得の価値観が随所で描かれていた。第6期では、単純な勧善懲悪では済まない複雑な社会の様子が描かれ、妖怪は現実からの逃避場所としての存在であることが強調されていた。

『ゲゲゲの鬼太郎』における妖怪たちは、日本の伝統的な生活様式や民俗文化、故郷の自然が失われていく現状、見た目のコンプレックス、失職や家族との別離など、時代によって変わる様々な社会の不安を反映し、その不安からの逃避場所として描かれていることが分かった。

かつての日本人は、自分の理解が及ばないものに立ち会ったとき、それを神様か妖怪の仕業とすることで自分の心を守ることが出来た。しかし、様々なことが科学的に解き明かされるようになった現代では、それは難しくなってしまった。今を生きる日本人にこそ、つらい現実から一時的に逃げられる場所として、妖怪は必要なのではないだろうか。